

『教育実践と省察のコミュニティに関するアンケート』集計結果

○質問1.「本日の教育実践と省察のコミュニティに関して、お聞き致します。

A～Cの問いに対し、1 良かった 2 やや良かった 3 あまり良くなかった 4 良くなかった の該当する番号に○を付けて下さい。また、4を選ばれた方はその理由をお書き下さい。」

A. パネルディスカッション(“自由に広く学び合うコミュニティ”) <回答数 2 3 >

1 良かった	2 やや良かった	3 あまり良くなかった	4 良くなかった
14	8	1	0

B. 実践発表(教育実践研究コミュニティながさき) <回答数 2 3 >

1 良かった	2 やや良かった	3 あまり良くなかった	4 良くなかった
15	7	1	0

C. パネル展示 <回答数 2 3 >

1 良かった	2 やや良かった	3 あまり良くなかった	4 良くなかった
11	11	0	0

○質問2.「次回に「教育実践と省察のコミュニティ」が開催される場合」 <回答数 2 4 >

是非来る	来てもよい	あまり来たくない	絶対来ない
9	15	0	0

<記述分>

『教育実践と省察のコミュニティに関するアンケート』

「教育実践と省察のコミュニティ」のタイトルにひかれて参加しました。教師の学びの場として、実践と省察のコミュニティの形成が必要であると思います。校内研修も重要な場ですが、学校を離れいろいろな学校の先生が議論できるような場づくりの必要性を感じています。本会をきっかけとして、継続したコミュニティとなることを望みます。

文科省の方が来られて、指導要領のお話をされたのが大変刺激がありました。現職とストレートマスターの研究の違い(実践力の研究)について、多方面から発表を聴くことができ大変有意義な時間でした。しかし、やや専門的すぎる内容で理解できない箇所もありましたので、よりわかりやすい表現での発表を望みます。

全国的に著名な先生方の話を直に聞くことができる貴重な機会でした。大学の先生や文科省の方の言われることは、現場の教員から見れば「机上の空論」と感じることも多いが、今回のディスカッションでは、普段我々がやっていること、あるいはやりたいと感じていることをきっちり根拠をもって言語化していただいたと感じるところが多かった。また、院生の発表やパネルでも、現場で無意識に行っていることを意識化していただいたと感じるところが多かった。有意義な会でした。感謝です。

研究生お一人お一人がそれぞれのテーマのもとよく研究されているなど感心しました。また、特別支援教育のパネルの多さからその重要性和、現場で通常学級の中にも特別な支援を必要としている子どもが多く在籍し、どう指導していくのか悩んでいる担当が多いのかなと感じました。この研究を現場に多く広げていただきたいと思います。

パネルディスカッションについては、文科省の先生方のお話を聞くことができ、とても参考になりました。しかし、視点が広がりすぎて、何を課題として取り組んでいけば良いのか分かりづらかったので、視点の焦点化が必要に感じました。パネル展示については、様々な分野に渡って研究を拝見することができ、それぞれの良い部分や応用できそうな箇所を自分自身の今後の教師生活にも取り入れていくことができれば良いと思います。

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

教職大学院

長崎大学大学院
教育学研究科

No.3

Newsletter

2011.3.14

2010.10.11

教育実践と省察のコミュニティを開催

Communities of Educational Practice and Reflection since 2010

授業実践力・教育実践力とは何であり、何であろうとするのか、学び合うコミュニティを支える教職大学院の可能性をテーマに本学SCS教室において、本学教育学研究科主催による教育実践交流会を開催しました。本号はその特集号です。

I部 自由に広く学び合うコミュニティ

9:30から12:00

<司会> 呉屋 博 (長崎大学教職大学院)

教育実践力とは何であり、何であろうとするのか 柳田 泰典 (長崎大学教職大学院)
日本の教師の育ち方と大学の関わり方 千々布敏弥 (国立教育政策研究所総括研究官)
教師に求められるものってなんだろう 太田 光春 (文部科学省初等中等長崎局視学官)

II部 教育実践研究コミュニティながさき

13:00から17:00

～教職大学院修了生(現職教諭)および教職大学院生による実践研究報告～

<司会> 香田 公裕 (長崎大学教職大学院)

教職大学院修了生(現職教諭) 岩崎 玲子 (長崎市立女の都小学校)
猿渡 京 (長崎県立鶴南特別支援学校)
教職大学院生(現職教諭) 得永美佐子 (子ども理解・特別支援教育実践コース)
田中丸 香 (国際理解・英語教育実践コース)
教職大学院生(ストレートマスター) 尾崎 拓朗 (理科・ICT教育実践コース)
井上 翔太 (学校運営・授業実践開発コース)
三浦 隆博 (国際理解・英語教育実践コース)



当日の発表者

III部 パネル展示

9:30から17:00 質疑は14:20から15:00

子ども理解・特別支援教育実践コース 小川 直仁 藤井 順子 吉田 綾子
川上 恭子 佐藤 照幸 高山 輝也
田中 達朗 吉川 透
瀬戸 梓 張 丹
学校運営・授業実践開発コース 緒方 健人 才津真理絵 佐藤 愛子
理科・ICT教育実践コース 安田 和哉
国際理解・英語教育実践コース 牧野 孝大
川崎 英華 深牧 克哉



パネル展の様子



I 部 自由に広く学び合うコミュニティ

「教師に求められるものって何だろう」 太田光春先生 講演要旨



太田光春
文部科学省
初等中等教育局視学官

フィンランドでは小学校の1,2年の間に徹底的に遅れないように指導する早期介入が行われており、全ての子ども達の学力を保障している。よりよい納税者を育てるとすることも視野に入れて、エリート教育ではなく全ての「人」を育てる教育を行っているのである。実は、日本の教育も同様に「人」を育てることがその目的

であり、教育基本法にそれが明記されている。教育基本法には一人ひとりの人格の完成を目指すこと、すべての人に平和で民主的な国家及び社会の形成者としての資質を備えさせることが目的として掲げられている。だから、教育を語る際には、学力だけに目を向けてはいけないテストのため、入試のための学校・学習であってはならない。大学に何人入れるかは、学校教育の目的ではないのである。社会貢献できる人・する人を育てることが大切で、知・徳・体のバランスの良い育成を行わなければならない。これが生きる力の基本である。学校教育法第30条2項で、「基礎的な知識及び技能の習得」「これらを活用して課題を解決するのに必要な思考力・判断力・表現力その他の能力を養うこと」「主体的に学習に取り組む態度を養うこと」の大切さが強調されているが、これは、

学校の使命が自律した学習者として生涯にわたり学習する基盤を培うことであるということの規定したものである。生涯にわたり学習する基盤を培うためには、毎時間の授業が、子どもにとって小さな成功体験になることが大切である。教師は、毎時間の授業の後で、「この授業で何人の子どもに学ぶ勇気や自信を与えることができたか、それらを奪ってしまうようなことはなかったか」を謙虚に振り返る必要がある。学習の主体は生徒である。そのためには、教師の一方向的なレクチャーではない授業、つまり言語活動の充実を図ることが大切である。友達の意見に耳を傾けたり、自分の意見を言うことで、子どもたちは、批判的思考力や論理的思考力を身に付けることができる。学びが速い人、遅い人はいるが、学べない人はいない。誰でも学び続けることによっていつか目標を達成することができるということを教師が言わなければならない。教育は学びの可能性を信じることを前提とした営みである。その際大切なのは、子どもの様子をしっかりと把握すること、すなわち、信頼性・妥当性のある評価をすることである。また、動機づけを大切にしながら、PDCAサイクル(Plan, Do, Check, Act)の一環として評価を行うことも重要である。評価をした結果、教師の指導が変わり、子どもの学びが変わらなければならないのである。なぜなら、評価もまた生涯にわたり学習する基盤づくりのために行うものだからである。

文責：中島和彦(教職実践専攻M1)

テーマ「授業実践力、教育実践力とは何であり、何であろうとするのか」

討論会はこのテーマで行われた。まず出た意見は研究の蓄積と関連だ。教職大学院では、実習を通じた実践が行われる。その実践を蓄積しつつ、テーマに関連性を持たせ研究していくことでお互いに実践力を高めていく可能性があるという意見が出された。

また、教職大学院では現職の教員と、学部からの院生という異なる者同士がともに学び合うことでの実践力の共有と高まりが図れるとの意見も出た。さらに、本学修士からは、教育現場と大学がさらに相互乗り入れを行い、長期的スパンでの実践研究を深めていきたいという意見も出された。

本学教職大学院の改善的提案としては、現在行っている月1回の議論の場である「クロスセッション」をさらに重点的に発展させ、「ニュースレター」とともに実践を

サポートする道具の開発を進めるべきという提案が出された。

最後に、人と人のつながり、研究と研究のつながり、現場と大学をつながり、この3つのキーワードを今後の教職大学院の発展の可能性として位置付けていくことを共通理解し閉幕した。

文責：野口亮介(教職実践専攻M1)



「日本の教師の育ちと大学の関わり方」 千々布敏弥先生 講演要旨



千々布敏弥
国立教育政策研究所
総括研究官

千々布先生は、講演の中で、学級経営の在り方、大学の先生と学校の教員の関わり方、生徒が主体的に学ぶモチベーションを育む授業とはどんなものかということを中心に述べられた。

まずは、学級経営の在り方については、学級のルールは明確にし、統一すべきであるというものである。進学校レベルの高校では、生徒の自主性に任せることで主体性や思考力が身につくであろう。しかし、小学校や中学校においては、児童・生徒の自主性に任せておいては、学級経営を立ち行かせるのは難しい。そのために、基本的に学級の決まりごとを十分に確認した上で、子どもたち一人一人の主体的な思考力・判断力・表現力を伸ばしていかなければならない。

次は、大学教員と学校教員との連携について、大学教員が学校現場の教員と連携することは、学校教員が指導のノウハウを新たに獲得し、さらに指導力に磨きがかかるチャンスに

なるというものである。特に、現場との関わりが密な大学教員が指導主事と連携することは、獲得した新たな指導法が他の教員にも波及するという点で有益である。また、大学教員は、関わった学校が変わるまで関わり続けることが重要である。批判のみでは、学校現場との距離が広がってしまうため、学校現場との関わりを持ち続けて様々な策を講じる必要がある。大学教員を見て指導主事が変わり、大学教員もその姿を見て変わる。お互いに強みを生かしていける関係が望ましい。

三点目は、子どもたちが主体的に学ぶモチベーションを育む授業とはどんなものかについて、まず、子どもたちにはそれぞれの学びがあり、それをクラスの中で先生と生徒で認めていくことを大切にするというものである。子どもが発問に反応したとき、その一人一人の答えを見つめ、教師を含め全員で受け止め認めるというものである。また、教師が言葉掛けや教材などを工夫して、子どもたちの自発的な学ぶ意欲をうまく刺激することが大切である。

文責：藤本健太郎(教職実践専攻M1)

「教育実践とは何であり、何であろうとするのか」 柳田泰典先生 講演要旨



柳田泰典
長崎大学大学院
教育学研究科教職実践専攻

教育実践を高度化していくためにはどうしていくべきか。現在、知識基盤社会といわれ、知識が生活や生産を変えるような新しい時代になってきている。しかし、知識基盤社会を支える教育目標としては、「生きる力」は限界があるだけでなく、矛盾する様々な考えが入り込み混在・対立せざるを得ないものである。高度な教育実践力をめざすためには、混在・対立する4つの原理[子ども中心主義、社会的効率主義、社会改造主義、社会(生活)適応主義]を検討し、知識基盤社会にふさわしい原理を提案する必要がある。

○**子ども中心主義**…学びの中心を児童・生徒の経験におき、自ら学ぶ、話し合い活動、体験学習などを実践する経験本質論である。しかし、経験に方向性や限定性を与えないため経験主義に陥り科学的認識にはなりにくい。原因は学力論と能力論の混在にあるが、子どもを中心にしながら「知識と経験」のスパイラルな学習過程をつくる必要がある。

○**社会的効率主義**…実用的価値の高い知識や技能を効率的に学習する教育で、実用性や教育実践の技術化、さらに目標・達成・評価が強調される。しかし、我が国の教育目標は、「心豊かな子どもの育成」など人格目標が多く、実用性、

技術性、PDCAは十分機能しない。PISA型学力を実用性と科学的認識の高度化を中心に再規定し、PDCAを機能させる必要がある。

○**社会改造主義**…現実社会の問題を批判的思考によって解決する能力を追求する。これには、学校による直接的な社会改革(ドイツの環境教育など)と学校による間接的な社会改革(ディベートなど)がある。我が国の場合、どちらも不十分であるが、当面は間接的な社会改革におき、探求、自己主張、対話、表現という市民教育を発展させる必要がある。

○**社会(生活)適応主義**…生活への適応と人格の統合を教育の中心に設定し社会的・道徳的態様の形成を行う。「基礎学力」「意欲・関心・態度」「人格指導による行為形成」「生きる力」などは、この範疇に入る。1+1=2(基礎学力?)は、それほど簡単なものではない。にもかかわらず、頑張れ、やる気を出せ、将来困る、しっかりなどで指導される。

教育実践の高度化を進展させる新しい原理とは、科学的認識・市民教育主義である。それは、①教育内容の組織化による科学的認識の形成(態度主義の排除、学力と能力の区別)、②授業過程における学習discourseの形成(IRE構造の転換:対話:子ども中心主義へ)、③人格指導による行為形成から行為指導による人格形成へ(市民教育)、④学級指導メッセージにおける「あなたメッセージシステム」から「わたしメッセージシステム」への転換、⑤専門性の確立による同僚性の拡大(反省的実践家)である。

文責：宮田貴光(教職実践専攻M1)